

⑩ 甫赤大祥忌摺

菜の花や何処へとふ行滝の末  
小むしろに這習ふ子や花のかけ  
はる雨の海雲買けり精進日  
鳥も居ぬ門田に降やはるの雪  
折と手を風のはなる、柳かな  
蛙なく方へ杖つく小家かな  
撫でてる木裏の霜や初桜  
すみれ摘ためにもおろす田舟かな  
竹の秋田芹の花はちりすまし  
ちる花や暮ををしかる人の上  
人の日を惜みて夜るも更しけり  
別れつ、逢つ、蝶の眠りつ、  
はる雨や洩る日の影は八つ下り  
日影もつ程に成けりさし柳  
羅を召れたかけやはるの月  
一嵐ふきたためてあり桜貝  
蝶の来て見て居る菊の根分哉  
春雨に見かへす夢のさむさ哉  
若草や去年来し道と思はれす  
花の雲日も入かてに見ゆるかな  
山ふきや水に蒔絵のちらし書  
細布を織りく軒の乙鳥かな  
一夜寐てむかししのはん野ら董  
また空もつめたし春も名のみにて  
うくひすに教られけり法の道  
手向にもけしきもたせて桜海苔  
かしましき中にさひあり夕蛙  
寐処を二階にしたり梅さかり  
陽炎や土にしまりのなき所  
いちくの花のかけあり閼伽の桶  
立去りし古巢ゆかしや鳥の影  
大船の動かぬ日なり舞小てふ  
ちる花のあとに鳴なり夕からす  
降ほとこの天気でもなし虻の声  
諂もなき庭先や赤つはき  
梅か香やこ、ろのうこく朝手水

京 梅室  
陸奥 多よめ  
江戸 一具  
為山  
卓郎  
山妓  
芭丸  
荷少  
芦月  
文海  
梅年  
弘前 蕉滴  
五溪  
仕候  
松光  
良月  
大蕪  
子考  
撲夫  
可藤  
可楽  
一瓢  
有節  
句佛  
黒石 松年  
紀計  
トニ  
見龍  
北夫  
龜山  
鬼堂  
三知  
柏年  
二山  
太成  
賀松

蝶鳥のたつねて来るや碑の迎  
此ころは膝にもよらす猫の妻  
燕の居ならふ隙もなかりけり  
心のみ蔭て手向ん梅さくら  
鐘ついた手てひとつかみ花すみれ  
佛の一日さひしはるのあめ  
うくひすの初音もけふの手向哉  
買足して仏事する若菜かな  
眼の先の樹々も霞て嶺のかね  
炉の炭の消たま、ある二月かな  
踏て見る土のゆるみや露の臺  
こ、ろして降夕雨や草の萌  
養父入の来てか、けるや仏の灯  
草臥て春の夜しりぬかり枕  
さしかけた傘の端より春の山  
牛士の伸て折ゆく柳かな  
かねの音のものにこもりて春の宵  
茶の口に鶯を聞立場かな  
おほろ夜や歩行馴たる畑の道  
三日月のかけ冷たいかなく蛙  
青柳や暮る、もしたらて遠歩行  
玉味噌の香もかくれけり梅の花  
よい処に水あり山は花さかり  
雉子なくやこちら向たる山の家  
常灯の一段高しおほろ月  
はる風や火繩□ひし□の口  
うくひすやほのく明の小松山  
摘あとを小鳥の養る若菜かな  
若草や駕の戸あけて一休み  
海原へ舞こむ朝の小蝶かな  
としよれとかくれては居す花の春  
一雨を通して唄ふ茶摘かな  
梅か香や筆取ながら眩まくら  
越かねる川なかめやる霞かな  
待し日をかひなく花の留守居哉  
雪まけを見せぬ椿のさかり哉  
泥ふんた鶏も見えけり梅の花  
うめ咲やきのふにかはる旅心

枝川 英里  
館岡 長耕  
板柳 汎平  
祖年  
文友  
木組 軒梅  
尾上 梅笑  
青森 素岳  
白魯  
芳山  
祇春  
有川  
步牛  
素笠  
可商  
北羊  
祇席  
酒泉  
素川  
冬古  
祇文  
冬里  
素文  
祇庭  
一升  
冬暁  
祇存  
冬有  
如峯  
弘年  
長榮  
一芽  
呉雪  
淇川  
長眉